

## 「ねがい」と「納得」

達也君（自閉症、知的障害）に出会ったのは、「がんセンター」の小児病棟でした。私がい  
るか分教室に勤めていたときのことです。

彼は高校時代、特別支援学校の重度重複学級に在籍していました。卒業後、脳腫瘍を発症し、  
一度は治療を終えましたが、再発が見つかり入院してきました。頭には大きな手術痕があり、  
片方の眼球は失われていました。これまで受けてきた治療のきびしさは、察するに余りありま  
す。

当時、二十歳だった達也君は院内学級の対象ではなかったのですが、病院ボランティアのシ  
スターが「佐藤先生、自閉症の子が入院してきたので、ぜひかわってください」と出会わせ  
てくれました。

挨拶に行くと、達也君は私に自分の描いた絵を見せてくれ、すぐに会話がはずみ仲良くなり  
ました。

私も病室で一緒に絵を描くようになると、好きな電車やキャラクターをリクエストしてくれ、  
楽しいやりとりが広がっていきました。外泊中に、彼の好きな絵を描き貯め、入院のときに渡  
すと、とても喜んでくれました。あるとき、ナースステーション前で「佐藤先生に会えてよかつ  
たね」と、ママに話しかけている姿を見かけたときは、（こちらこそ）と胸が熱くなりました。

私にとって、授業の合間や放課後に、彼の病室に顔を出すのが楽しみなひとときになってい

ましたが、そんな時間は、長くは続きませんでした。知り合って2ヵ月足らずで、彼は亡くな  
ったからです。

知らせを受けて駆けつけたときの、ママの言葉が忘れられません。

『学校時代が一番きつかったです。先生からは、だめなところばかり言われて。卒業してよ  
うやく少し落ち着いたら病気になってしまいました。病気はつらかったけど…でも、入院して  
からすごく評価が上がったんです。しんどいときは『おかあさん、背中をさすってください…  
ありがとう』って言ってくれて。どんなに痛い治療でも『いやだ』とか『やめて』とか一切言  
わなかった。そして、処置のあとは必ずお医者さんや看護師さんに『ありがとう』ございました  
た』って頭を下げていました』

私にはとても想像の及ばないがん治療の痛みやつらさ。病気を治したい「ねがい」とつらい  
治療は病気を治すためという「納得」があればこそ、達也君は最期まで弱音を吐かず闘い抜  
き、医療者やママへの感謝も忘れなかったのでしょう。

最後にママが力強く言いました。「達也は自慢の息子です」

学校時代に言えたらよかったのに。そう言える学校生活をつくるのが私たちのやるべきこ  
と。「ねがい」を育み「納得」を生み出すことがどんなに大切なことか。達也君からの教えが  
心に刻まれます。